

「学び続ける」日伯日本語教師育成プロジェクト

Mukai Felipe Naotto（筑波大学大学院）
 飯田朋子（ユライ・ドブリラ大学プーラ）

1. はじめに

国際交流基金（2020）の「海外の日本語教育の現状」の調査によれば、ブラジルには、380の日本語教育機関、1,182人の日本語教師、それから2万6千人以上の学習者が存在すると推定されている。ブラジルの学習者は、北米や西欧と異なり、その大半が学校教育以外で学習していることが特徴的である。また、吉川（2018）は、公教育以外の機関を「日系団体」、「私塾」、「語学学校」、「その他の機関」に分類している（表1）。日本語教師の所属の割合は、公教育を含めた全体の中で、それぞれ42.6%、6.9%、24.2%、5.1%であると明らかにしており、約8割が公教育以外に所属していることがわかる。しかし、ブラジルの教師勤務体制は、複数の教育機関に勤務することが慣習的で、日本語教師もその例外ではない。そのため、実践の機会は多くても、多忙なスケジュールのため、教師間の交流や意見交換が少ないことが懸念される。

表1 教育段階、教育機関の分類及びコースの種類（吉川，2018，p.38）

	教育段階	教育機関の分類	コースの種類
I . 公教育機関	中 等 初 等 教 育	a. 公立学校 (州立/市立)	・ 課外コース
		b. 私立学校	・ 必修科目 ・ 選択外国語科目 ・ 課外コース
	高 等 教 育	c. 連邦大学	・ 専攻
		d. 州立大学	・ 選択外国語科目
		e. 私立大学	・ 公開講座 ・ 国境なき言語
II . 公教育以外の機関	f. 日系団体	(機関と対象によつて多様)	
	g. 私塾		
	h. 語学学校		
	i. その他の機関		

第二次世界大戦まで、日系ブラジル人の家庭内では日本語が使用されており、日本語学校では国語の教科書を使用し、継承語としての日本語教育が行われていた (Moriwaki 2008)。一方で、今日では家庭内では日本語が使用されず、ポルトガル語を中心とした生活を送っているため、外国語としての日本語教育の実践が普及しつつある。遠藤（2011）は、テレビやインターネットの普及が日本のポップカルチャーを後押しし、日本語に興味を持ち、日本語学習を始めるブラジルの非日系人の学習者が増加していると述べている。さらに、新型コロナウイルス感染症に配慮した結果としてインターネットやICT活用を前提とした授業が増えており、これは日本語教育においても同様である。学習者も多様なニーズを持つ時代となり、それに即した授業を行う必要があるため、新たな技術や教授方法を身につけなければならない。その結果、報告者らは「学び続ける」教師の必要性を感じ、新たに「『学び続ける』日伯日本語教師育成プロジェクト」を立ち上げた。本プロジェクトは、ブラジル日本語教師向けに講演会やワークショップを企画する研修会とブラジル日本語教育関係機関にインタビューで構成されている。ここでは、研修会とインタビューについて報告する。

2. 目的

本プロジェクトでは、3つの目的を設定する。第一に、SNSを通してブラジルの日本語教師のネットワークを構築し、授業実践や活動を共有し合える「学び続ける」教師の関係構築を試みる。八田（2022）は、「他の教育機関の教員と関わりをもつことにより、自分の職場内では得られない視野を得られ、新たな手法、視点を獲得することができたという意見が散見される」（p.10）と述べ、他の教師との関わり的重要性について示唆している。

第二に、研修会では教師同士だけではなく、各分野に精通した講師を招き、現在の日本語教育の状況について幅広く知見を得て、教師自身の授業の内省を行うことも目的にしている。

そして、第三の目的は、実際にブラジルに渡航し、日本語教師の養成を支えている日本語教育関係機関にインタビュー調査を行うことである。インタビュー調査より、ブラジルに属する日本語教師の実態を把握することを目的としている。

本プロジェクトによって、教師のネットワークの更なる強化と、現地日本語教師の教育の向上が期待される。そして、実際に日本語教師を養成している現地の日本語教育関係機関にインタビューすることで現地日本語教師の実態と課題点を明らかにし、今後の支援の方法について検討することが可能である。

3. 研修会

3-1 日本語教師の募集方法

ブラジル日本語教師間のネットワークを利用し、メッセージアプリ「WhatsApp」で「日本語オンライン勉強会」というグループを作成し研修会に参加希望の日本語教師を募集した。また、ブラジル日本語センター（CBLJ）に協力を得て、232号（2022年8月）の会報に研修会の情報を掲載し、参加者を募った。



図1 232号の会報

WhatsAppグループには100名以上の日本語教師が参加した。ブラジル、日本、アルゼンチン、ボリビア、パラグアイ、コロンビアなどからの参加もあった。本プロジェクト終了後も日本語教師が積極的に実践の共有やブラジル国内外の情報共有を行っており、一つの交流の場としてのコミュニティが構築された。

3-2 研修会の実施

第1回から第4回の研修会はZoomで、第5回は対面とZoomのハイブリッドで行った（表2）。研修会には、毎回30名～40名程度の日本語教師が参加し、ブラジルと日本では12時間の時差があるため、ブラジルの日本語教師が比較的参加しやすい日曜日の午前中に開催することにした。

表2 研修会の概要

回数と開催方式	参加人数
第1回（オンライン）	42名
第2回（オンライン）	36名
第3回（オンライン）	44名
第4回（オンライン）	32名
第5回（ハイブリッド）	39名

実施期間は2022年7月から2022年11月で、プロジェクトメンバーやゲスト講師による研修会を行った。第1回では、お互いの自己紹介や、オンライン授業による実践のメリットとデメリットの共有を主に行った。第2・3・4回では、ゲスト講師を招き、オンラインと対面の学習環境、南米日本語教育のポテンシャル、日本語教師の役割について研修会を開いた。

そして、第5回はブラジル日本語センターの講堂で、ハイブリッド方式での「三位一体のワークショップ」を行った。三位一体のワークショップは、館岡（2019, 2021）の提唱する「専門性の三位一体モデル」（図2）に基づいて行った。

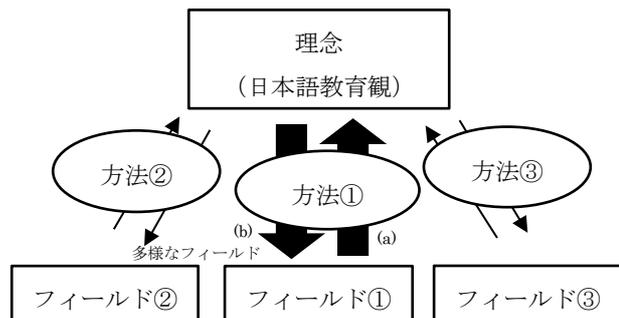


図2 専門性の三位一体モデル（館岡, 2019, p.170）

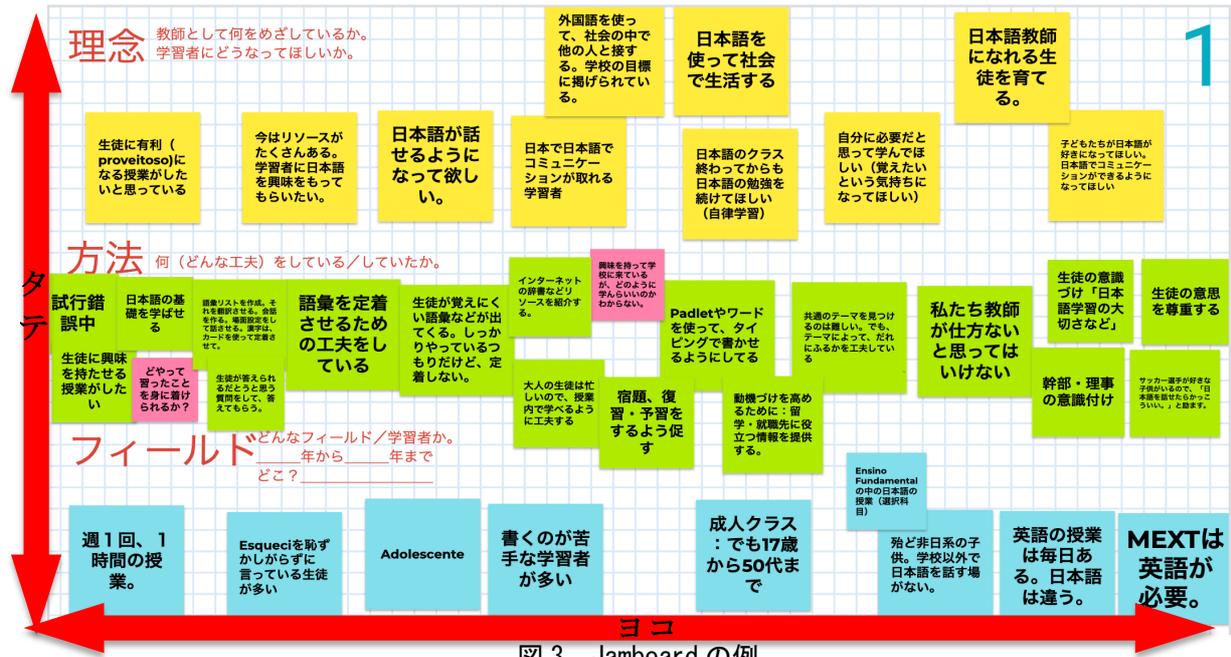


図3 Jamboardの例

舘岡（2019）は、理念（日本語教育観）とは、日本語教師がどのような日本語教育を実現しようとしているかということであり、方法とは、実際に教室などで展開する教育の方法をさし、フィールドとは日本語教育実践の場であるとしている。

このモデルを利用することで、日本語教師の教育観、実践、フィールドの関係を可視化することができる。そして、これらの関係性を内省促進ツールとして用い、実践を見直すことで、学び続ける日本語教師育成が期待できる。

三位一体のワークショップでは、Jamboard上で理念・方法・フィールドを記入した後、理念・方法・フィールドの三つの関係という「タテ」と日本語教師の理念同士・方法同士・フィールド同士という「ヨコ」をグループで語ってもらった。図3はその一例である。

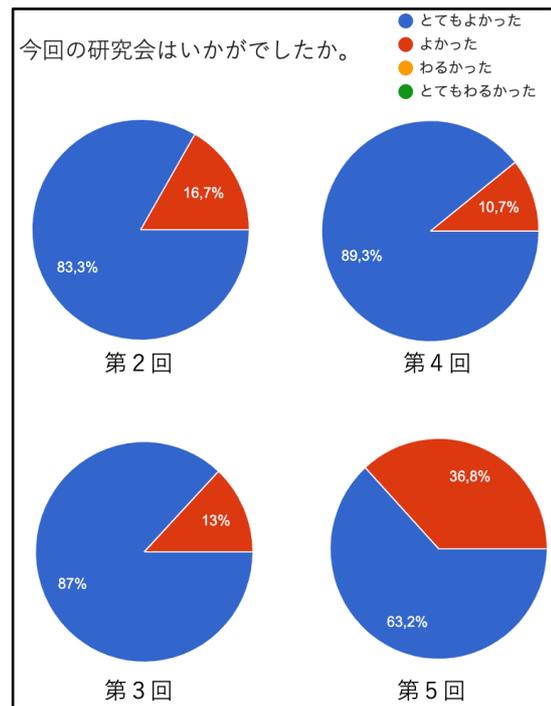


図4 参加者アンケート

3-3 研修会の参加者評価

講演会とワークショップの実施後に、参加者に任意でアンケートに回答してもらった。その評価は、図4のとおりである。

第1回は交流を目的としていたため、アンケートを行わなかったが、第2回～第5回の実施後アンケートでは「とてもよかった」「よかった」の回答のみで、「わるかった」「とてもわるか

った」のような回答が見られなかったため、参加者の満足度は高いと考えられる。

また、各回のアンケートに「今日の講演会・ワークショップに参加して、どうでしたか。これから、どんなことをしたいと思いましたか。」という記述項目を設け、回答してもらった。参加者からの主な回答は次の通りである。



- 時々、立ち止まって、客観的に考えることも大事だなと思いました。
- 自分の学習者に合わせたオンラインでさせたい経験、オンラインでなければできない経験を考え明確にする必要がありますね。
- 勉強会でおっしゃったとおり、新しいアプリ、ソフトをインターネット上で使うことが「良い」授業になるとは限らない。
- インターネット上でのコミュニケーション、オンライン授業、オンラインミーティングはこれから先、ずっと続いていくと思います。これらの利点はさまざまです。私たち教師も機械の進化にある程度ついていかなければならないと思います。
- 日本語教育の専門家を輩出できる土壌作りを意識する。
- 南米の日本語教育でどんな事をやっているのかをもっと日本や世界に発信していきたいと思いました。
- 南米の日本語教育は、海外の日本語教育に比べても、それほど変わりはないことを感じました。
- 今まで実践共有は活発に行われていますが、このようなブラジル日本語教育の全体像を俯瞰的に見るのは初めてだったので勉強になりました。
- 普段あまり学習者の「日本語能力」や「日本語を使う場所」を強く意識していないが、実はやっているのでもっと教師側が強く意識して計画、実践、ふりかえってその繰り返しをしていこうと思う。
- ワークショップでは多様な考え方を学び、とても参考になりました。
- 改めて、学習者目線で考える大切さを学びました。
- 今日の講義を参考に、教える教師ではなく「学習者の学び」をサポートする教師を今後も育成していきたいです。
- 「学ぶとは、何かに気づき、自分が変わる事」これを常に心に刻んで、全ての

学習者や教師が「学ぶ」ことができるよう、試行錯誤を繰り返していきたいです。

- もう一度日本語教育理念について学校が掲げる理念と教師自身の理念について見つめ直したい。
- 移住地の事情も分かったし、学校の環境によって生徒の日本語力、授業の内容などずいぶん違うことがわかりました。
- 改めて教師としてなぜ日本語を教えるのか考えさせてもらいました。

参加者はゲスト講師による講演やワークショップに加え、他の日本語教師との交流を重ねるにつれ、自分の実践を内省しつつ、自らの教師実践を客観的に見ることでできたと思われる。

また、「今後の講演に対する要望」では、本プロジェクトの研修会のみならず、ブラジル日本語教師が今後の研修会に求める具体的な興味関心を探ることができた。そして、日本語教師が日本語教育に対して学びを深める積極的な姿勢を感じることは僥倖であると言える。

4. 日本語教育機関へのインタビュー

4-1 日本語教育機関の概要

2023年2月2日から2月11日までブラジルに渡航し、ブラジルにおいて日本語教師の養成を支えている日本語教育関係機関にインタビュー調査を行った⁽¹⁾。

インタビューは、ブラジリア大学（UnB）、国際交流基金（JF）サンパウロ文化センター、ブラジル日本語センター（CBLJ）、国際協力機構（JICA）サンパウロ事務所の4機関に対して行った。

各機関が行う日本語教育に係る活動を簡潔に概観する。ブラジリア大学は日本語学科の教職課程を持ち、各機関と連携したプロジェクトの企画などを行っている。国際交流基金サンパウロ文化センターは、専門家の派遣、研修会の企画、助成金関連の窓口としての活動などを行っている。ブラジル日本語センターは、全伯・汎米日本語教師研修、日本語教師研修養成講座などを行う機関である。国際協力機構サンパウロ事務所は、日系社会青年海外協力隊や日

系社会シニア海外協力隊の派遣などを行っている。

上記の4機関はいずれも、ブラジルにおける日本語教師養成において不可欠な役割を持つ機関であると言える。

4-2 インタビューの概要

インタビューは基本的には対面によって行い、必要な場合のみオンラインで行うこととした。

本調査ではあらかじめ作成したインタビューガイドを用いて、半構造化インタビューを行った。

また、個人情報の保護や調査内容について説明した同意書を作成し、各機関の代表協力者から署名をもらうことでインタビューへの同意を取った。加えて、インタビューは同意を取った上で録音・録画を行っており、正確なインタビューの記録を取ると共に、ブラジル日本語教育研究の重要な資料としてデータを保存している。

インタビュー調査の内容について概観する。本インタビュー調査では、ブラジルに属する日本語教師の実態を把握することを目的としている。また、機関が考える日本語教師養成の意向として、どういった日本語教師を育てたいか、どのような日本語教師に育ててほしいかという点について重点的にインタビューを行った。具体的には、以下の項目などについてインタビューを行った。

- 日本語教師養成、日本語振興への取り組み
- 各機関の日本語教育における理念
- ブラジルにおける日本語教育の変遷
- ブラジルにおける日本語教育の幅をどのように捉えているのか
- 日本語教育関係の仕事に対する課題の認識
- 日本語教育関係機関との連携と役割をどのように捉えているのか
- 日本語教育の発展のためにどのような活動を行っているか

以上の4機関へのインタビューより、社会的に多様なブラジルでは一概に「ブラジル日本語教育」をまとめることは難しく、日本語教育には、都市部、日系人が多い移住地などの地域性が強く関わっていることが示唆された。例としては、日系社会が強く根付いている土地では、

日本文化などを含めた継承日本語教育が生活と密接に関わって必要とされる場合があると言える。一方で、一部の都市では、就職や仕事の関係で日本語学習を選択する学習者がおり、日系・非日系が入り交じった日本語教育が展開されている地域も存在する。また、特筆すべき点として、近年では、これまで役割が分けられていた日本語教育関係機関が連携し、日本語教育の発展のための取り組みが行われている。このことが、ブラジル日本語教育の時代的な変遷の特徴として取り上げられている。

このことから本調査においては、ブラジル日本語教育に関して、これまでの先行研究で述べられてきた、教育史的で画一的な「継承語から外国語への変遷」とは異なる結果が得られたと言える。

5. まとめ

本プロジェクトにおける第一の目的について、WhatsAppグループを通して、各々の実践が共有されたりブラジル国内外の日本語教育の情報共有の場として活用されたりする事例が見られた。これにより、ブラジル日本語教師のコミュニティーをある程度構築することができたと思われる。今後も、このグループを足がかりとして、ブラジル日本語教師による積極的なブラジル日本語教育の発信を行うことが可能である。

第二の目的に関しては、研修会に参加した日本語教師から、日本語教育についての新たな学びを得ることができ、教師としての自身の内省を行うことができたというアンケート結果が多く得られた。日本語教師の反応から、講演会及びワークショップによる成果は十分なものであったことがうかがえる。

第三の目的については、日本語教師の養成を支えている日本語教育関係機関に対するインタビュー調査から、ブラジル日本語教育における地域性と、時代的な変遷等を明らかにすることができた。これまでの先行研究とは異なる研究結果が得られたところもあり、ブラジル日本語教育の現場調査の必要性を示すことができたと言える。



6. 今後の課題

今後の課題として、以下の3つを挙げる。一つ目に、ブラジル日本語教師の継続的・持続的な実践共有のためのネットワークを構築すること。二つ目に、ブラジル日本語教育に特化した勉強会・研修会の内容を検討すること。三つ目に、

ブラジル日本語教育について発信し、学術的発展に寄与すること。

これら3点を課題として今後も調査研究を続け、ブラジル日本語教育の発展に貢献していきたいと考える。

注

(1) 日程の都合上、日本帰国後のオンラインインタビューとなった機関も存在する。

謝辞

本プロジェクトは日本語教育学会の「2022年度日本語教育グローバル人材奨励プログラム」に採択され、支援を受けたものです。指導教員である筑波大学の小野正樹先生にプロジェクトの準備や研修会の実施においてご助言をいただいたこと、深くお礼申し上げます。また、講師としてご登壇いただいた伊藤秀明先生、松田真希子先生、横溝紳一郎先生に厚く感謝申し上げます。そして、調査協力を快諾してくださいました国際協力機構サンパウロ事務所、国際交流基金サンパウロ文化センター、ブラジリア大学、ブラジル日本語センターの皆様にご心から感謝の意を表します。最後に、研究会に参加して下さった皆様に、心より感謝申し上げます。

参考文献

- (1) 遠藤クリスティーナ麻樹 (2011) 「教育のプロになろう」モラレス松原礼子編『日本語教育入門=Ensino e aprendizagem da língua Japonesa no Brasil: 教え方を学ぶ前に』国際交流基金
- (2) 国際交流基金 (2020) 『海外の日本語教育の現状 2018年度日本語教育機関調査より』 <<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey18.html>> (2023年03月13日)
- (3) 館岡洋子 (2019) 「専門性の三位一体モデル」『早稲田日本語教育学』26, 167-177.
- (4) 館岡洋子 (2021) 『日本語教師の専門性を考える』ココ出版
- (5) 八田浩野 (2022) 「中堅日本語教師の「研修」を考える」『文化外国語専門学校 紀要』34, 1-25.
- (6) 吉川一甲真由美エジナ (2018) 「ブラジルの日本語教育の現状」福島青史・吉川一甲真由美エジナ (編) 『南米における日本語教育の現在と未来—日系社会のポテンシャル—』国際交流基金サンパウロ文化センター, 37-60.
- (7) Moriwaki R., Nakata M. (2008). *História do ensino da língua japonesa no Brasil* ブラジルにおける日本語教育史 その変容と近年の動向. Editora Unicamp.